

# 戦後日本の「大衆芸術・娯楽」研究の動向

— 附・関係主要文献目録 (1945年～1964年7月) —

津 金 沢 聡 広

- I はしがき
- II 関連用語について
- III 研究の動向
  - 1) 出発点をめぐって, 2) 「大衆社会論争」前後, 3) 1960年以降
- IV 研究の課題

## I は し が き

明治以降に限った場合、庶民 (Common Men) の思想や文化についての研究史は、少くとも、権力者・官僚および知的・芸術的エリートの思想や文化についての研究史と比べ、さほど豊かであるといえない。それは、既に指摘されているように、敗戦までの学問・芸術が、専ら支配権力に奉仕するためのものとして組織化されてきた過程と対応する。研究者の多くは、権力者に役立つ仕方考え、官僚の言葉で語ることに慣れた。

こうした研究の偏り、こわばりへの反省は、敗戦の現実認識を土台として生れた<sup>1)</sup>。その有力な担い手のひとつは、戦後いち早く「哲学改造運動」に着手した「思想の科学研究会」のグループであろう<sup>2)</sup>。庶民の思想や文化についての戦後の組織的研究は、この民間研究サークルによる思想運動を中心に進められたとあって過言でない。「大衆芸術・娯楽」はその一環領域として、庶民の思想や文化の主要な表現・伝達様式としてとらえられ、ここにはじめてマトモな研究対象として位置づけられたといえる<sup>3)</sup>。

「大衆芸術・娯楽」を、それが、マジメでない<sup>4)</sup>という理由で、あるいは今日あまりに商業主義的・消費的にすぎるということから、ことさら軽視する風潮は、(とりわけ、アカデミズムに) 今なお根強い。だが、われわれは、少くとも「文

化はコミュニケーションの過程に生じ、コミュニケーションの仕方は、文化の性格を強く規定する<sup>5)</sup>と考えるならば、「大衆芸術・娯楽」の問題は、その消費性をも含めて、今日の日本文化の根底と深く関わりあう領域であることを否定し去ることはできない。

われわれは、現状における研究の立ちおくれ<sup>6)</sup> 欠陥、を認めるにやぶさかでないが、それとひきかえに、研究の客観的評価の労を避けてはならないと思う。この領域研究が研究史の浅さのわりに、学問的にも貴重な成果を少なからずもたらしてきたことに注目したい。

小論では、戦後日本における「大衆芸術・娯楽」研究の推移をたどり、その過程で問題となっていくつかの論点を整理・検討してみたい<sup>7)</sup>。そのことから、この領域研究の現代的意義や今後の研究課題をいく分でも明らかにする目安が得られるかも知れないからである。もちろん、「大衆芸術・娯楽」研究といっても、種目別、作品別に多くの研究が行われている上に、それらの問題を総合的に取扱った標準的な著作はまだ出ていない。従ってこの多様なジャンルをすべて網羅的にとりあげることは差当り不可能である。(その参考資料として、巻末に「主要文献目録」をつけた。) 小論では、主として「大衆芸術・娯楽」“論”，すなわち「大衆芸術・娯楽」をどう見るか、という基本的視角、ないし社会・文化・哲学的レベルでの主要と思われる研究の諸論点を整理し、検討することに力点をおきたいと思う。

註 1) 戦前からつづいた庶民の思想や文化についての(庶民の立場に立つ)研究領域には、民俗学や生活綴方などがあるが、それらの成果が学問的評価の対象となり、日の目をみたのは、敗戦以降に属す。

2) 当時の代表者のひとり、川島武宣氏は、会の研究態度について、「われわれは、哲学を単純に思想的な観念的な存在として、いわば形而上学的に探求するのではなく、哲学を人々の現実の行動としてたえず現象して行くところのものとして、すなわち経験の世界に属する現実的な存在として、いいかえれば、一つの『科学』的研究の対象とする」と述べている。川島武宣『ひとびとの哲学叢書一発刊の辞』（中央公論社）1950年。

3) 「思想の科学研究会」は、「哲学改造運動」を軸に、「大衆芸術研究」のほか、論理学共同研究、転向研究、身の上相談研究、庶民列伝づくり、等を主な研究主題とし、戦後一貫して、「異った思想的立場の自由な相互交流および相互批判を原則」として活動をつづけている。

4) 山本明「マス・コミにおける笑いの構造と機能—マジメ否定論」（『放送朝日』1964年4月）は、「大衆芸術・娯楽」に対する「マジメ=不マジメ」論を批判したユニークな論文であり、この領域研究上の示唆に豊む。

まず、「マジメ」の反対はすべて「不マジメ」なのではないとし、その対立概念に「反マジメ」を指定する。「反マジメ」は、「マジメというぬきさしならぬ論理、偏狭な論理・権力者の論理を根本からゆすぶり、うちこわし、ついにはマジメを克服して新しい価値をつくりだす創造的な動力」になり得るといふ。その意味で、「大衆芸術・娯楽」とは、まさに、特権をもたぬ庶民の「反マジメ精神」を象徴的に伝えあい、育てあげてきた主要な表現・伝達様式にはかならない。

5) 鶴見俊輔・多田道太郎・樋口謹一「ルソーのコミュニケーション論」『ルソー研究』（岩波書店）1951年、218頁。

6) 「研究の立ちおくれ」を規定する対象内部の要因のひとつに、素材としての断片性・非統一性をあげることができる。この点に関連して、上山春平「哲学の力」（『思想』1954年5月3～6頁）は、「日本近代思想史の共同研究プラン」にふれ、次のように指摘している。

「与党的思想」や「野党的思想」に現われる「どちらかといえば歴史の表層にうかびでたインテリのややバタくさい思想」に対し、「庶民の思想は、広くしかも深くその底を流れている土くさい思想です。それは、落語・漫才、いろはがた、大衆小説、新興宗教、などに、断片的に定着されていますが、インテリの思想のように統一的な表現を与えられていないので、これをとらえるのは極めて困難です」

7) アメリカを中心としたこの領域研究の動向を論じたものに、加藤秀俊「大衆文化研究の動向」『思想』1958年6月、佐藤毅「最近の大衆娯楽、余暇の研究」『思想』1960年5月、がある。参照されたい。

## II 関連用語について

「大衆芸術」(Popular Arts) という用語は、今日必ずしも一般的に承認されていない。従来の「芸術」理念からすれば、それは芸術として未熟なもの、低俗なものであり、いわば非芸術とみなされている。慣用的には、むしろ「大衆娯楽」という用語に一括されることが多い。そのほか、類似的な用語に「大衆芸能」「新芸能」「民衆娯楽」あるいは「マス芸術」等がある。だが、それらはいずれも各論者によって異質な文脈で使用されており、そこに若干の混乱がみられる。小論では便宜上「大衆芸術・娯楽」としたが、この用語法にはいく分注釈を必要とする。というのは、両者には領域上必ずしも共通項でくれない部分もあり、又どちらの用語を採用するかが、研究上の接近法の相違をも示しているからである。ここでは、とりあえず、小論で取り扱う研究の範囲を明らかにする限りで、関連する主要な用語や研究分野について概観しておきたい。

「芸能」という用語は、一般に民俗学及び歴史学の対象次元のものとして把握されている。これらの芸能研究ないし芸能史研究は、「大衆芸術・娯楽」研究にとって、重要な関連領域であり、三者の研究上の協力態勢をどう具体化するかという問題も、今後のこの領域研究の主要な課題のひとつとなろう。

とりわけ、柳田国男の民俗学は、はじめて学問の立場からこの領域研究に取組み、貴重な業績を数多く残している点で最も注目される<sup>1)</sup>。

民俗学の芸能研究には、それが「郷土研究」として出発したことと深い関係がみられる。鶴見俊輔氏は、「柳田国男の著作は、限界芸術の考察に基礎をおいた一種の芸術論の体系」<sup>2)</sup>（「限界芸術」という用語については後述）であることを指摘したが、要するに、民俗学は、芸術ないし芸能に関する発生論的立場に位置するものといえる。ここでは、主に、日本の地域共同社会での具体的な集団生活を探る手がかりとして、芸能の発生及びその伝承過程に注目する。発生期の芸能は、それぞれ、地域共同体での生産、宗教、教育、政治等と

分ちがたく、しかも主体的に結びついていた。

柳田は、民俗学の分野として、たとえば、大衆芸術としての流行歌から民謡を区別するために、民謡を、いくらさかのぼってしらべてみても、作者名の分らぬもの、と定義したが、民俗学が一般に、「郷土芸能」ないし「民間芸能」と呼ばれるいわば地方的存在としての芸能に力点をおくのも、その文脈においてである。民俗学は、学界及び論壇を支配してきた西欧的な芸術論が、その立論の素材として拒否している部分にこそ、むしろ問題の重要性を認めてゆこうとする。

折口信夫の学問の継承者である池田弥三郎氏は、民俗学の一分野としての芸能研究について次のように述べる<sup>3)</sup>。芸能は、美学の対象たりうるほどに、その芸術的価値の高さは問題とならず、史学の対象たりうるほどに、史的叙述にたえうる存在ではない、むしろ、文献的固定以前の存在である。民俗学の芸能研究は、その芸能の芸術的価値づけが目的ではないし、また、過去における姿を文献本位に、年代的に叙述することだけで、満足するものでもない。芸能をもって、日本人の性格の集団的表現としてこれを見てゆく、という立場をとる。池田によれば、「完成した芸能」たとえば、武家の式楽となって固定した後の能楽とか江戸三座成立以後の歌舞伎とかは芸能研究として扱わない。芸能は、芸術の前段階に留るものとして理解し、芸術にみられない信仰の宗教的な「制約」<sup>4)</sup>の解除が、芸能の芸術への「純化」とみる。

この芸能=民俗という観点や芸能一般が信仰的制約をもっているという考え方には、林屋辰三郎氏らの歴史学としての芸能史研究の立場から有力な反対がある<sup>5)</sup>。林屋は、従来の(歴史学的)演劇史等が、文献・記録主義に偏し、ややもすれば、それが時代の権力者の歴史と歩調を共にしてきたことを反省しながらも、本来、芸能史研究の目的そのものはひとつだと説く。そして、芸能史には、その方法論上、「民俗芸能」研究と文献による「芸能史」研究という二つがあるのではなく、民俗的あるいは伝承的史料を用いるか、文献・遺物的史料を用いるかの二つがあるのであり、「しかもその二つの方法は、可能なかぎりにおい

て統一的に把握されることが望ましい」という立場から、新しい芸能史研究の構想と課題を提唱している<sup>6)</sup>。そこでは、民俗芸能あるいは郷土芸能の外、演劇として発展したものや、茶道・華道などと呼ばれる「室内の芸能」をも含めて考察する。

「芸能」と「娯楽」との関係については、その用法上しばしば論理的な混乱がみられる。たとえば、本田安次氏は、「芸能が信仰からはなれるとその多くは娯楽となる」とし、例として鬮鷄・鬮牛・管絃・双六から人形芝居・かぶき・踊り、などをあげ、さらに野球・パチンコといった今日の大衆娯楽を同一線上に並べて論じているが、<sup>7)</sup>これは芸能=信仰という観点の強調から、様式自体と娯楽機能とを混同している矛盾的な適用例といえよう。

「大衆芸能」という用語は、近世の大都市成立以後、大衆的規模で享受されるようになった芸能、と理解されているようである。西山松之助氏は<sup>8)</sup>、「大衆芸能は、芸術として昇華しえない以前のおそびの世界に属し、芸術を鑑賞する人たちはちがった大衆が、活字でないものによる『芸』を眼や耳や鼻などで楽しむもの」とする。この場合おそびに二つの方向がある。(イ)創作のプロセスが同時に鑑賞のプロセスでもあるようなおそび一茶、花、香、俳句、川柳などのような遊芸の世界、(ロ)他の人が演じる芸を鑑賞するおそび<sup>9)</sup>。前者の場合、家元制度の組織化が問題となり、後者には芸をめぐって二つの重要な特色が展開する。すなわち、a) 興行資本の成立、b) 伝統的な芸の伝承という徒弟式教授法の踏襲、である。さらに、(ロ)の種目について、西山はそれが近代へ移行する過程を分析し、それらを3類型に分けて考察を進めているが、その分類の第1の類型—近代資本主義経済のもとに興業化ないしマス、コミ化されたもの、および、外国の影響によって変化したもの—は、今日の「大衆芸術」という用語とほぼ重なりあう領域とみてよい。

それらを、「大衆娯楽」と呼ぶかどうか、にはふたつの側面で問題が残る。ひとつは、それらの社会的機能の何を重視するかという視角の問題であり、第2は、「大衆娯楽」の内容には「大衆芸

能」ないし「大衆芸術」の範囲以外のものも含まれるということである。この問題は次節で詳述するが、要約すれば、「大衆娯楽」論は、多くの政治学者、社会学者に代表される。いわば巨視的な体制認識の視角から現状の「大衆娯楽」=政治的逃避・アパシーの図式でとらえる政治主義的傾斜を強くもつ立場である。「思想の科学」グループが代表する「大衆芸術」論は、ほぼ同様な体制認識をもちながらも（やや微視的ともいえるが）新しい芸術や思想の創造主体の視角に執着する。

第2の論点については、福田定良氏の「面白さ」(interesting→interest)を軸にした「大衆芸能(この場合「大衆芸術」と同義)論は娯楽と芸術との区分に有効である<sup>10)</sup>。同じ大衆娯楽でも落語の面白さと競輪の面白さは同一ではない。野球やパチンコの面白さは、日常生活を離れた一種の遊戯としてわれわれの興味をひくにすぎないのに対し、大衆文学、映画、浪花節などを面白いと感ずることは、自分の世界、ひいては自分の生き方に対する関心からくる。こうした享受の仕方の基本的な異質さで、大衆芸能(芸術)と単なる大衆娯楽とは区別されうる。大衆芸能には、あくまで「民衆の生活に根ざした関心を動かす技術」(福田はこれを「芸」と呼ぶ)が確立している。従って「大衆娯楽」といった場合、各種の賭け事やスポーツ見物、物見遊山といった余暇活動のすべてを含むより広義な用語法となる。

この領域研究の用語体系の混乱は、根本的には、日本文化の二重構造に基因する「芸術」理念の狭いとらえ方、及びその貴族的性格にある。この点に関して、鶴見俊輔氏は、西欧的な「芸術」のとらえ方が、日本の急速な近代化過程で果した利点を評価した上で、そのマイナス面をも打開する注目すべき新しい「芸術」の用語体系を提出している<sup>11)</sup>。

a) 「純粹芸術」(Pure Art)——専門的芸術家によってつくられ、それぞれの専門種目の系列に対して親しみをもつ専門的享受者をもつ。(今日の用語法での「芸術」に当たる)

b) 「大衆芸術」(Popular Art)——専門的芸術家によってつくられるが、制作過程はむしろ企業家と専門的芸術家の合作の形をとり、その

享受者としては大衆をもつ。(「純粹芸術」に比べ俗悪なもの、非芸術なもの、ニセモノ芸術と考えられている作品)

c) 「限界芸術」(Marginal Art)——両者よりもさらに広大な領域で芸術と生活との境界線にあたる作品、いわば両者の母体としてある。非専門的芸術家によってつくられ、非専門的享受者によって享受される。(「民俗芸術」という用語とほぼ重なる領域であり、芸能もこれに含まれる。)

これは、様々な芸術様式をその制作過程及び芸術家と享受者との社会的相互関係を軸に<sup>12)</sup>、20世紀以降の通信・伝達手段の発達、民主主義的政治・経済制度の世界的規模における成立という状況に対応させて体系づけた用語法ということが出来る<sup>13)</sup>。

小論では、この鶴見の用語法に従い、その「大衆芸術」の領域に関する研究及び、それらと研究視点・方法において密接な連続性を有する「限界芸術」に関わる研究とを、主たる考察の対象とする<sup>14)</sup>。従って、民俗学及び歴史学プロパーとしての芸能研究ないし芸能史研究はここでは除外しておく。「大衆芸術」の娯楽的側面に力点をおくいわゆる「大衆娯楽」研究は考察の対象に含まれるが、そのうち特に「大衆余暇」研究に比重をおく分野については、当面附随的に取扱うにとどめたい。

「大衆芸術・娯楽」としたのは、以上のような理由に基いている。

註 1) 柳田国男の龍大なる著作のほか、この系列の仕事として、単行本では、竹内勝太郎『芸術民俗学』(1934年)、折口信夫『日本芸能史六講』(1941年)、『日本芸能史ノート』(1957年)、池田弥三郎『日本人の芸能』(1957年)、『日本芸能伝承論』(1962年)、等があげられる。雑誌には、『民俗芸術』(1928年1月～1932年9月)、『芸能』(1943年6月～1944年9月)、『芸能復興』(1952年10月～)、等がある。

2) 鶴見俊輔「芸術の発展」講座『現代芸術・1』(勁草書房)1960年、所収、208頁。

3) 池田弥三郎『日本芸能伝承論』(中央公論社)1962年。3～7頁、82～92頁参照。

4) 芸能を成立させる信仰的「制約」の点から芸能を考察する場合、1)、季節・舞台(機会)、2)俳優(作者)、3)観客(読者)、4)台本(書物)等の方面が考えられるとしている。この観点から「文学の発生母体としての芸能—芸能の台本としての文学伝承」研究に比重をおいている。(池田

弥三郎『前掲書』82～92頁，参照)

5) 林屋辰三郎『中世芸能史の研究』(岩波書店) 1960年，のうち「序説—芸能史研究の諸前提」参照。

6) 林屋辰三郎『前掲書』31～36頁，参照。

歴史学としての芸能史研究の課題として，

①研究対象とする芸能を国際的環境において把握すること。

②地方史・女性史・部落史というような新しい民衆史の観点の重視。

③日本芸能の内部における相互的関連の重視。

④観客の立場—社会的条件の側面から全体を総合して考察すること。

⑤文献史料に限定せず，民俗・伝承的史料も正しく歴史の中に位置づけてゆくこと。(方法論として)，の五つをあげている。

林屋氏を中心とする芸能史研究会からは雑誌『芸能史研究』(1963年4月創刊，64年7月で第6号)がでている。

7) 講座『日本民俗学大系・9—芸能と娯楽』(平凡社) 1958年，本田安次「総説」10～12頁参照。

8) 西山松之助「大衆芸能における近世から近代への推転」『思想』1960年12月，参照。

9) 幕末期の大衆芸能(口)の種目として次のものがあげられている。(西山松之助「前掲論文」2頁，参照)

1. 曲芸…奇術，水からくり，軽業，曲馬，手品，三味線曲引，等。

2. 特技…足芸，馬芸，八人芸，百人芸，等。

3. 物真似…声色，顔にせ＝七面相，身ぶり，所作事，浮世咄，名鳥声色。

4. 舞踊…唐人踊，かんかん踊，江戸芸子踊，出雲大社神事舞，太神楽，等。

5. 語芸…落し咄，ナゾ解き，軍事講談，軽口咄，昔噺，三人かけあい浮世話，ちょんがれ節，アホダラ経，祭文説経，等。

6. 軽演劇…茶番狂言，照葉狂言，猿狂言，にわか芝居。

7. 歌舞伎浄瑠璃…影絵，写し絵，人形つかい，女義太夫，座敷浄瑠璃，豊後浄瑠璃，等。

8. 大道芸能…大道の独楽廻し，居合抜，野だいこ，流し芸人，辻説法，辻講釈，万才，鳥追，等。

10) 福田定良『民衆と演芸』(岩波新書) 1953年，1～21頁<芸術と大衆芸能>参照。

11) 鶴見俊輔「芸術の発展」(前掲)，203～208頁参照。

12) 「社会的関係そのものの認識を総合原理として」芸術全般を考察しようとする立場は，すでに藏内数太氏の芸術社会学の構想の中に，その基本的観点が提出されている。(藏内数太『文化社会学』(培風館) 1943年，287～314頁，参照)

13) ほぼ同様な観点から，南博氏の「パーソナル芸術」「マス化芸術」「マス芸術」という用語法がある。それは形式的モデル論としては意義があっても，具体的な種目の適用上混乱があり，必ずしも

充分な用語法といえないように思う。(南博「パーソナル芸術・マス化芸術・マス芸術」『現代芸術・4』(勁草書房) 1961年，所収，参照)

14) 具体的なジャンルとしては，大衆小説，講談，落語，万才，浪曲，流行歌・ジャズ等の民衆歌謡，大衆映画，喜劇等の大衆演劇，紙芝居，さし絵，写真，漫画，奇術，放送の娯楽番組やドラマなどの研究をさす。

### Ⅲ 研究の動向

敗戦(1945年)以降，現在に至る日本の「大衆芸術・娯楽」研究の推移過程は，その成果からみてほぼ1955年を境に，ふたつの段階を経てきているように思われる。まず，'45年から，'54・5年頃までを第1の段階とみる。この領域研究が戦前とは異った新しい視角から提唱され，その方向と基礎が確立された出発点ともいうべき時期である。

'56，7年頃から第2の段階に入る。初期の成果を踏み台として，この頃からさらに各ジャンルに亘って研究の拡がりをみせた。この段階はふたつの時期にわけられる。ひとつは，'56年頃から'60年頃にかけてのいわゆる「大衆社会論争」前後の時期。第2は，「戦後」認識の転換期となった安保闘争以降である。もちろんその区切り目はゆるやかなものであるが，ほぼ'60年を境に，各ジャンル別研究の再編成ないし体系化が試みられ，模索されつつあるといえる。

#### 1) 出発点をめぐって

戦前の日本における「大衆芸術・娯楽」論には，大別してふたつの流れがある。

ひとつは，大正期の「民衆芸術論争」<sup>1)</sup>をきっかけとして，昭和のプロレタリア文学運動にひきつがれる「芸術の大衆化」論<sup>2)</sup>の系譜であり，他は，権田保之助の著作に代表される娯楽教育政策ないし労働政策の立場からの「民衆娯楽」論<sup>3)</sup>の系譜である。

本間久雄，大杉栄らの発言にはじまる「芸術大衆化論争」は，昭和初期のプロレタリア文学運動の中で，中野重治，藏原惟人，林房雄らの論争によってさらに深められ具体化された。吉本隆明氏によれば，この問題の論点はふたつある。ひとつ

は、大衆をプロレタリア文学の周辺に、いかに結集し、いかに政治的に教養するかという問題。他のひとつは、大衆コミュニケーション手段の発達にとともに、大衆が通俗大衆文学・大衆娯楽（映画・ラジオ・演劇等）のまわりにあつまる傾向にあるのを、いかにしてプロレタリア芸術のまわりに転換させるかという問題<sup>4)</sup>である。「芸術の大衆化」つまり、プロレタリア芸術を軸にいかに大衆の政治的組織化を進めるかが、この立場の大衆芸術論の本質的意味であり、いわゆる「大衆芸術・娯楽」はその視点から組織さるべき対象として副次的にとらえられるにすぎない。

一方、「民衆娯楽」研究は、大正中期から末期にかけて、橋高広・権田保之助らを中心にはじまるが、その「研究書のほとんどは、娯楽教育政策（主に文部省・警視庁のきも入りによる）と労働政策の立場から民衆娯楽の実態調査を行ない、その実態把握を目ざしたもの」<sup>5)</sup>であった。この領域研究のひとつの大きな特徴は、その多くが、権力者の側から要請され、いわば、民衆教化策ないし文化統制策の一環として、統合されてゆくところにあり、「民衆娯楽」のエネルギーをその内側から育てあげるのではなく、外面からの規制に視点がしばられた。

「芸術大衆化」論争といい、「民衆娯楽」研究といい、たしかに「大衆芸術・娯楽」の問題に注目し、論及した先駆的な業績ではあったが、大衆を主体的な存在としてとらえる態度をもたず、従って、「大衆芸術・娯楽」を単に低俗なものとして再認識することにとどまり、その内部に立入って論及する作業を怠っている点で、両者の立場の相違にも拘らず、そこに奇妙な共通性を見出すことができる。

「大衆芸術」をあくまでプロレタリア芸術の「大衆化」としてとらえてゆく観点は、戦後も、マルクス主義的芸術論者によって守られ、その基本原理として復活されているが、その多くは、依然として単純な政治主義に陥り易い傾向があり、組織論としてオプティミズムにすぎるといふ批判を免れていないように思う。

他方、「民衆娯楽」研究は、戦後、権力者の側に立つ視点を脱却し、むしろ、権力に対する抵抗

の立場から大衆の生活構造を重視する研究方法に組みかえられ、主に大衆操作＝政治的逃避・分析を中心に、労働・余暇政策論、娯楽産業構造論、あるいは、社会教育論的研究へと受けつがれている。

戦後の「大衆芸術・娯楽」研究は、これまでのように大衆をマスとしてとらえるだけでなく、大衆のひとりひとりへの関心をもち、「この関心を通して大衆からまなび、私たち自身の感覚・思索行動を高めて行きたいとねがう」<sup>6)</sup>「思想の科学研究会」を中心として発展する。鶴見俊輔、武谷三男、都留重人、川島武宣、竹内好、南博、久野収、桑原武夫、鶴見和子氏らに代表されるこのグループの活動は、これまで日本で尊ばれてきた高踏的、特権的な官僚の思想を排し、まず自分自身の中にひそんでいる官僚めいた考えを掃除してゆくこと、さらに実生活者にしっかり結びついた思想を日本につくり出してゆくことが、思想運動本来のあり方だ、という認識に立っている。「思想」は、一部少数の、とくにアカデミズムの中の専門的思想家の独占物ではなく、われわれひとりひとりが思想の担い手なのだと考える。

「思想の科学研究会」による成果は、会誌『思想の科学』（1946年5月創刊）『芽』（1953年1月創刊）などに次々と発表されていったが、その最初の集大成は、1950年の『夢とおもかげ—大衆娯楽の研究』（中央公論社）であろう。収められた主な論文には、鶴見俊輔「日本の大衆小説」、武田清子「吉川英治の思想と作品」、南博「日本の流行歌」、園部三郎「現代流行歌曲について」、三浦つとむ「浪花節の歴史的な性格」、などがある。諸論文とも、それぞれ精密な考察によってこの領域研究の学問的価値への認識を高めた先駆的な大衆芸術論といえるが、とりわけ、鶴見論文は、コミュニケーション研究<sup>7)</sup>としての新しい方法論を提示すると共に、多くの問題点を指摘している点で注目される<sup>8)</sup>。

鶴見は、大衆小説をコミュニケーションという社会現象のひとつの特殊例としてとらえ、通信路、送り手、内容および形式、受けとり手の条件という4つの側面から、それらが「いかに微妙に相互規定するかを、立体的に把握」し、「日本の

大衆小説」の特質を鋭くえぐってみせた。たとえば、その通信路研究の重要性にふれ、新聞連載の小説が日本の大衆芸術のカナメの位置を占めること、および、新聞・広告との近似性などを指摘している。資本の意志を大衆に押しつける点で広告と似ており、その日の出来事の日常生活への影響を、現在進行中の小説にとり入れるところは、新聞の編集技術と相似している。そのことから新聞小説は、単なる娯楽をこえ、「民衆に生活上のさまざまな知恵をあたえ、時流にさおさしてゆく術を教える道具とさえなる」という。さらに、送り手分析や内容分析の手法を駆使して、たとえば、大衆小説が、日本の庶民芸術の伝統と形態的同一性をもつことを指摘する。吉屋信子の小説の特徴は、浪花節と同じく、会話および行動記述の部分とフシのついた咏嘆文とのくりかえしにある。講談の影響も吉川英治らの作品に歴然としており、また歌舞伎と同じように型が楽しめる点も大衆小説の重要な特徴だと説く。

こうした大衆小説の様々な条件やメカニズムの分析を通して、鶴見は、「日本の“純文芸“は、大衆の受け入れ体制 (receptivity) を考えにいれずして行われた近代化運動の一部として」理解し、日本の大衆小説は、「この無理な近代化に附随して当然おこってきた特殊の文化様式であり、日本の半封建資本主義の封建的部分と資本主義的部分とのサケ目をうめる役目を買って出た」<sup>9)</sup>と位置づける。鶴見論文は、この視角から大衆小説が単なる娯楽以上に「哲学性の濃厚な芸術」であることを確かめ<sup>10)</sup>、さらにその受け入れ体制を検討することによって、コミュニケーション変革の方法や「最適速度」(optimum pace) の予測をめざしたものであった。

『夢とおもかげ』所収の他の論文も、鶴見と同様な視角から、各ジャンルの作品の内容分析や読者・観客の実態調査を試み、『大衆芸術』をとおして、日本人のこころの特性を明らかにした先駆的な業績といえる。そのうち、園部論文は、流行歌の音楽的特質に注目し、歌詞分析の方法がしばしば、ことばそのものの進歩性・保守性といった面だけにまどわされ易い弱点をカバーして、歌詞と曲との構造的な意味連関を追求し、新しい歌曲

創造の可能性を示唆したユニークな論文である。

この年には、文学研究の立場から、大衆文学を広く社会の問題との連関において考察する必要を説いた、桑原武夫「大衆文学論」(『世界』1950年1月)も出たが、以後1955年までに発表された『夢とおもかげ』に連なる主な仕事として、次のものがあげられる。今村太平「映画にあらわれた日本精神」(‘50年)、桑原・梅棹ら大衆文化研究グループ「宮本武蔵は読者にどう受けとられているか」(‘51年)「小説“宮本武蔵”における観念構造」(‘53年)、鶴見俊輔「1つの日本映画論」(‘52年)、今村太平「アメリカ漫画と日本漫画」(‘53年)、鶴見俊輔『大衆芸術』(‘54年)、南博『日本人の娯楽』(‘54年)、園部三郎『演歌からジャズへの日本史』(‘54年)、竹内好「吉川英治論」(‘54年)、佐藤忠男「仁俠について」(‘54年)鶴見俊輔「かるたの話」(‘55年)など。これらは、いずれも、「大衆芸術・娯楽」を具体的な素材に、大衆の眼と心で新しい日本文化論を展開した注目すべき文献であり、この領域研究上の貴重な原型となった。なかでも、‘54年に発表された佐藤論文は、自分の体験そのものを大衆映画と重ねあわせ、考えぬくことで、大衆の内側から新しい芸術批評の方法を提出したばかりでなく、そのしなやかな解き口 (interpretant) を通して、「大衆の心をとらえ、つき動かし、しかし結局その心を閉ざしてしまう」<sup>11)</sup>大衆芸術の二面性をも明らかにした最初の成果といえよう。そのほか、これらの系列とほぼ近い視点をもつ主要な仕事に、福田定良『民衆と演芸』(‘53年)がある。福田は、独自の「芸」の理論を軸に、大衆が寄席芸術、大衆映画、新興宗教などに寄せる関心のありかを探り出し、いわば大衆倫理の社会的意味を鋭くとらえた。

「大衆娯楽」論の最初の代表的な仕事は、1951年8月の『思想』特集号にみられる。清水幾太郎「大衆娯楽について」、松田道雄「娯楽の位置づけ」、中井正一「脱出と回帰」、大河内一男「国民生活と大衆娯楽」、瓜生忠夫「娯楽企業としての映画」など。清水論文はこれらの問題意識を代表して要旨、次のように述べる。

戦後日本の大衆娯楽の過度の発達は、心ある人

々にとって憂うべき問題である。各人の苦しい生計にひき比べても不健全にすぎる。ことにその不健全さは、人々の政治的関心をマヒさせることにある。大衆娯楽は、日本の運命、自己の運命に向けらるべき関心を、名人戦へ、ホームラン第何号に向けさせるからであると主張する。この政治的アパシーという点で、芸術か娯楽かという方式は、日本の場合あまり有効でない。なぜなら、両者はともに現実からの逃避にすぎないからである。そして「芸術家たちが高貴且つ孤高の逃避を重ねている間に、娯楽専門の大衆作家たちは、忙しい且つ疲れた大衆を、日々、古い政治的価値の方へ引き寄せている。」と指摘する。

清水論文は、前年に発表した「機械時代」(『思想』1950年8月)<sup>12)</sup>の認識のもとに、娯楽に逃避する大衆をいかに政治的関心に向けて再組織化するか、ということを一貫しており、その立論はやや政治主義的パシニズム、貴族主義的モラリズムにすぎるうらみはあるが、政治的反動気運の高まってくる占領期から講和を迎える段階での一種の警世的発言として説得力にあふれる問題提起であった。

松田論文は、娯楽を「余暇の処理」として片づけることを批判し、資本主義的生産様式と娯楽のもつ因果関係に注意を払いながら、「習俗のひとつの形態としての娯楽」の保守性、安易さをのりこえるためには、「労働の論理」を確立する立場に立つほかはないと力説し、中井論文は、娯楽のもつ問題を、生活よりの遊離と脱出としての娯楽が、人間性の回復と追求としての芸術にまで、いかにして連続するのか、という視点から、この脱出の回帰を論及したものであった。

この特集は、娯楽に対するぬきがたいばかりの不信感が基調にあり、主に、娯楽企業の発達に対する政治的危機意識からその「憂うべき」状況打開の方策の必要を呼びかけたものであり、体制的・巨視的展望に関する限り、大衆娯楽研究への基本的な問題提起であったといえよう。つまり、資本主義的生産機構にあっては、娯楽は、大衆を眠りにさそう保守的価値をもつにすぎないのであって、大衆は、資本の論理のままに受け身的に娯楽に逃避せざるをえない。問題はむしろ、娯楽をと

りまく社会的環境にあり、その中身をも規定している政治的・経済的諸条件にあると指摘する。いわば、日本の独占資本主義分析の一環として、大衆娯楽の問題を把握する立場といえる。これは、主に、労働・余暇政策論、娯楽産業構造論へと発展し、その基本原理として受けつがれてゆく。思想の科学研究会を中心とする「大衆芸術」論が、大衆のひとりひとりに関心をもち、その感情やこころの内側から論及を試みるのに対し、あくまで受け身的マスとしての享受者大衆の側面を重視するところに、この立場の大きな特長がある。出発点をめぐるこれらふたつの立場は、その後のこの領域研究のふたつの顔を代表する。

- 註 1) 「民衆芸術論争」については、藤竹暁「大衆文化」『今日の社会心理学・5』(培風館)1963年、及び、『現代文芸評論集(一)』(『現代日本文学全集94』筑摩書房)1958年、を参照。
- 2) プロレタリア文学運動を中心とする「芸術大衆化論」の問題点については、吉本隆明『異端と正系』(現代思潮社)1960年、を参照。
- 3) 「民衆娯楽」研究の動向については、佐藤毅「最近の大衆娯楽・余暇の研究」『思想』1960年5月、を参照。
- 4) 吉本隆明『前掲書』参照。
- 5) 佐藤毅「前掲論文」121~122頁。
- 6) 先駆社版『思想の科学』創刊の趣旨、1946年5月。
- 7) コミュニケーション研究は「お互いの心持を伝えあう仕方、場所、目的、条件および歴史の研究」と理解しておく。鶴見和子編『デュイ研究』(春秋社)1952年、129頁参照。
- 8) 以下、鶴見俊輔「日本の大衆小説」『夢とおもかげ』(中央公論社)1950年、を参照。
- 9) 鶴見「前掲論文」48~49頁。
- 10) 研究上の限界としてふたつの考慮すべき問題点をあげている。ひとつは、大衆小説のもつ広告性ということであり、もうひとつは、あくまで理想小説であるという点である。従って、大衆小説からぬき出された哲学類型は、1) 大衆の生活のすべてではなく、2) しかもそれらの哲学類型は他の生活行動面において再認識される必要があり、3) 大衆小説研究はあくまで理想小説としての認識のもとにその側面に関する調査に重点をおくべきである、と指摘している。鶴見「前掲論文」53~55頁参照。
- 11) 多田道太郎「大衆芸術」『思想の科学』1962年5月、84頁。
- 12) 清水は、交通通信の新しい技術・機械の発展過程に注目し、それが、日本の独占資本主義の発展と相互に密接に結びあっており、マス・コミュニケーションは、保守的・反動的な政治的価値を補



強することに役立っている。人々は、マスコミの一方的支配下にあり、人間性は分裂し、またビューロクラシーの部品となったと指摘する。こうした、機械時代の諸条件が、大衆を政治的アパシーに追いやる政治的社会的メカニズムについて清水は以後、一貫して論及を進めている。たとえば『社会心理学』(岩波、1951年)「機械文明」(岩波講座『現代思想・8』1957年)「テレビジョン時代」(『思想』1958年11月)、等参照。

## 2) 「大衆社会論争」前後

『思想』1956年11月特集号にはじまる「大衆社会論争」のひとつの重要な副産物は、いわゆる「大衆文化」(Mass Culture)の問題に新たな照明をなげかけたことにある<sup>1)</sup>。ここでは、その論争の是非はともかくとして<sup>2)</sup>、論争のあたえた影響についてみれば、少くともそれによって、大衆の問題を社会構造的にとらえ直そうとする気運が盛り上がってきたことは事実であるし、その余波をうけて「大衆芸術・娯楽」の問題も論壇の新しい関心をよびおこしたといえる。'56年から'60年にかけては、出発点で提起された諸問題がさらに深められたばかりでなく、この領域研究に参加する研究者層の著しい拡がりをみせ、(巻末・文献リスト参照)ことに、「大衆文化」的視角からの論議が活潑となり、それは、この領域研究の一般理論化を促す契機となった点で注目される。

まず、鶴見俊輔氏の「一つの日本映画」論('52年)の発想と論理を発展させ、その優れた解き口分析を軸に大衆芸術の社会的意味づけを深めた主な仕事として、佐藤忠男『日本の映画』('56年)、鶴見俊輔「鞍馬天狗の進化」「円朝における身ぶり」と象徴」をはじめとする諸論文(主要論文は『誤解する権利』58年に再録)があげられる。これらは、大衆芸術のもつ象徴的表現形式を重んずる思想性について、創造的な視野を開拓した貴重な文献であり、この領域研究のひとつのピークを示す。鶴見の「活字によらないで、しかも、微妙な思索を伝え得るように、新時代に即した」「新しい絵文字、新しい身振り言語の体系」化の提唱に連なる最初の成果といえよう。

'57年頃からは、従来の貴族趣味的芸術理論にあきたらず、今日の大衆社会的状況における「芸術」の意味や社会的機能を(日本の「大衆芸術・

娯楽」の問題をもおりこんで)再検討し、その体系化を試みようとする研究が進められる。桑原武夫「芸術の社会的効果」('57年)、荒正人「芸術と大衆」('57年)、加藤秀俊「大衆文化」('57年)日高六郎「大衆社会における芸術と大衆文化」('58年)、竹内好「権力と芸術」('58年)、多田道太郎「複製芸術について」('58年)、鶴見俊輔「芸術の発展」('60年)、などに代表される。荒論文は音楽と大衆とのつながりを中心に、多田論文は、オリジナルとコピーという観点から文明論的に、現代芸術の意味と役割について考察を進めたものであり、鶴見論文は、限界芸術の再検討を通して、純粋芸術や大衆芸術を変えてゆく道筋を示唆する点で重要であろう。鶴見は、柳田国男、柳宗悦らの業績に注目しながら、日本文化の遺産をつぐ方法は何か、を問いただし<sup>3)</sup>、新しい芸術創造の可能性およびその体系化のための仮説をうちだした。なお、娯楽の意義および社会的機能に注目し、それを主に文化・社会心理学の立場から再検討したものに、森口兼二「娯楽」('56年)がある。これは「余暇活動としての娯楽」研究の問題領域を展望する上で貴重な文献である。

「大衆社会論争」をきっかけとする「大衆文化」論は、大衆文化を大量生産・大量伝達を媒介とする「ブルジョア文化」の商品化ないし下降化としてとらえ、その内容の感性的消費性による享受者大衆の「情緒化」および体制内部における非政治化・受動化の過程を重視する<sup>4)</sup>立場からなされた。「大衆文化論」の主流を占めるその後の多くの立論も、その延長線上にあり、底流に政治主義的志向を強くもつ点が特長といえる。57年に発表された加藤秀俊氏の『中間文化』論は、独自の戦後文化発展段階説<sup>5)</sup>によって、論議を文化のレベルにひきもどし、「中間文化」成立の諸条件の考察を通して、それが必ずしも不健全とのみいきれない積極的側面をもつことを評価し、論壇の注目をあつめた。加藤論文は、多くの「大衆文化論」が政治的断罪主義に傾き、結局大衆文化ないし大衆芸術の俗悪視に終始するその非生産性への批判でもあり、大衆社会的状況の進行に対応する積極的な文化理論ないし芸術理論の必要性を強調したものであった。

‘58年に至って問題化される「テレビ時代」の出現は、これら「大衆文化」論議の主要な応用問題としてたち現れ、テレビが有力な娯楽メディアとして迎えられたことから、「大衆芸術・娯楽」研究にとっても新たな課題のひとつとなる<sup>5)</sup>。その組織的な問題提起は、『思想』1958年11月特集号にはじまるが、その後の多くの立論は、一方では「マス・コミの暴力」「大衆操作」「政治的アパシー」の視角から、支配権力への抵抗の武器としてのメディア分析・受け手分析研究へと発展し、他方では、テレビ制作技術論、社会教育論、送り手側のマーケティング・コミュニケーション調査へと傾斜する。「大衆芸術・娯楽」論と直接的に関連する60年までの主な仕事としては、佐々木基一「大衆芸術の新しい形式」(57年)『テレビ芸術』(59年)、加藤秀俊『テレビ時代』(58年)、島田厚「テレビ芸術の基礎」(58年)、佐藤毅「娯楽メディアとしてのテレビジョン」(60年)『文学』特集「テレビ芸術」(60年2月)などが注目される。

そのほか、この時期の特色を示す動向として、労働者階級のため「大衆芸術・娯楽」の“民主的”再編成論が活発に行われたことがあげられる。戦前の思弁的レベルでの「芸術大衆化論」とは異なり、現実に、職場の様々な芸術サークル活動や「労映」「労音」「うたごえ運動」などの大衆文化運動が着実に伸びてきたことを背景としている。たとえば、関根弘「新しい歌」(55年)、関鑑子「うたごえ運動の理論」(56年)、野間宏「芸術の新しい担い手」(58年)、多田道太郎「大衆文化運動」(60年)など。特に、野間および多田論文は、運動発展の過程をたどり、大衆の主体的な芸術活動と新しい芸術創造の課題に論及したものであり、この問題の全体的視野を得る上で重要な文献であろう。

なお、雑誌『文学』が、『思想の科学』と並んで、「大衆芸術・娯楽」研究に関する特集号をこの時期に次々と送り出したことも特筆される。ことに、歴史学者、文学者、民俗発者の発言が目立ち、たとえば「大衆芸能」特集(‘60年12月)にも明らかなように、「大衆芸術・娯楽」の問題を、その歴史的諸条件と組み合わせて再検討しようとする方向に歩みはじめたことが注目されよう。

‘60年5月の『思想』「大衆娯楽」特集号は、‘51年の『思想』特集号の問題提起を受けつき発展させた最近の主要な成果ということができる。南博「娯楽の肯定と娯楽の否定」、松下圭一「大衆娯楽と今日の思想状況」、田中清助「労働観・余暇観の変化と社会体制」、野口雄一郎・稲葉三千男「大衆娯楽と娯楽産業」、遠藤湘吉「消費革命の社会的・政治的意味」、などをはじめとする諸論文である。

南論文は、階級社会の大衆娯楽を考える手だてとして、民衆娯楽が成立する江戸期に注目し、「生の充実」として娯楽を求める民衆と、娯楽を操作する支配者とは、おのおの娯楽をどのように考えてきたか、という見地から、両者の娯楽観の内部に立入って分析し相互に照らしあわせ、民衆娯楽の思想史的課題を論及したものである。松下論文は、大衆娯楽の今日の問題点を、変革の論理との連関で、その政治的意味、大衆社会的疎外、変革思想の形成、生活様式、大衆娯楽の物質的条件および思想構造、等の各点からとらえ、問題点への巨視的展望を設定したものである。田中論文は、ソヴェト社会をモデルに社会主義社会における労働観・余暇観の所在を追求し、野口・稲葉論文は、娯楽産業の構造分析を通じて、大衆娯楽の現代社会における位置づけを試みた。他のいずれの論文も鋭い指摘を含む力作ぞだろいだが、この特集に一貫する論点は、独占資本主義体制下に進行する大衆社会的状況の中に、大衆娯楽の問題をどう位置づけ、どう認識すべきかの基本的課題を追求したことにあった。諸論文はそれぞれに、今日の大衆娯楽が、独占資本の論理に貫かれ、支配体制による大衆操作がますます強化されている現実を解剖し、主に労働・余暇政策の視角から、状況打開の積極的方策の確立を提唱する<sup>7)</sup>。ここで強調された享受者大衆の感性的消費化、政治的受動化・アパシーの深化の現実を再認識することはもちろん必要だが、同時にそれが、警世的指摘にとどまることなく、大衆娯楽の底にひそむ大衆のエネルギーの創造可能性にも着目し、その新しいプログラムを用意する配慮も対策上の必須な手順といえるであろう。巨視的研究がややもすると陥りがちな欠陥は、問題の解決を急ぐあまり、性急な

政治的断罪主義に走りかちな態度にあると思う。だが、その性急きは禁物である。なぜなら、「大衆芸術・娯楽」のはらむ問題は、一方で政治・経済的側面と深く関わることにまちがいないが、他面それがあくまで文化の領域に属する問題であることもまた確かだからである。今日の「大衆芸術・娯楽」が、たとえプラスであれマイナスであるにせよ、それを支えているのは、実は「大衆」なのではなく、ほかならぬわれわれ自身なのだということが銘記しておくべきだろう。

註 1) たとえば、この問題の口火をきった松下圭一氏は、大衆社会の成立を促進した条件として大衆文化の形成をあげ、その重要性について次のように指摘する。「生産力の発展は、Ⅰ人口量のプロレタリア化をもたらすとともに、Ⅱテクノロジーの発達による生活形態の平準化をもたらし、この平準化による大衆文化の形成がⅢ大衆デモクラシーないし、大衆ナショナリズムにおける政治的平等化に実質的内容をあたえてゆくのである」松下圭一「大衆国家の成立とその問題性」『思想』1956年11月、44～45頁。

2) 「大衆社会論争」の経緯及び問題点については、高根正昭『「大衆社会論争」と組織』『思想』1958年6月、を参照。

なお、『思想』1960年10月号は、「大衆社会論の再検討」を特集している。

3) この「伝統のつき方」への関心は、鶴見の「大衆芸術」研究の出発点から一貫している重要な問題意識であり、その解決方法のひとつとして、ラティス (Lattice=枠) の問題を考える。「教育勅語、歌舞伎、イロハがるた、桃太郎の民話等、伝統文化の主な要素はいずれも、それぞれ一つのラティスである。これを背負っているわれわれの思想はラティスをはなれないでいる。庶民芸術・大衆芸術にはラティス的なものが含まれている」鶴見俊輔『大衆芸術』(河出新書)1954年、参照。

4) 松下圭一「前掲論文」45頁、参照。

5) 戦後の日本文化の発展は、高級文化中心の段階、大衆文化中心の段階を経て、今日では、両者の平準化としての中間文化中心の段階に入ったことを指摘し、それぞれのプロセスと問題状況を社会心理学的視野から追跡している。

加藤秀俊『中間文化』(平凡社)1957年、参照。

6) 電波メディアを有力な新しい娯楽様式としてとらえると、映画研究と同様、単に通信路の問題としてばかりでなく、電波メディアに関わるすべての問題が、「大衆芸術・娯楽」の研究領域に組みこまれることになるが問題が多岐にわたるので、ここでは一応、深く立入ることを避ける。

7) この特集所収の佐藤毅「最近の大衆娯楽・余暇の研究」(前掲)は、日本におけるこの領域研究の展望にもふれ、その主要な課題を提起している。

### 3) 1960年以降

安保反対闘争および新安保体制の成立は、戦後培われ育まれてきた市民主義にとって、その重大な試練となり、戦後認識の転換を迫るものであった。戦後にはじまる多くの思想運動が、この時をもうひとつの出発点として、自らの足どりを再検討せざるを得なかったように、その社会的背景を担って、「大衆芸術・娯楽」研究も、再検討の段階を迎えたといえる。60年以降のひとつの大きな特色は、研究の再編成ないしジャンル別体系化の気運が強められたことにあり、事実、その方向にそったいくつかの注目すべき仕事が生み出された。この領域研究に直接関連する主なものを年代順にあげると、加藤秀俊「にっぽん視聴覚文化史」『CBCレポート』(61年7月～62年11月)、園部三郎『日本民衆歌謡史考』(62年)、鶴見俊輔・加太こうじ・他『日本の大衆芸術』(62年)、加藤秀俊編『大衆芸術家の肖像』(講座『20世紀を動した人々・8』62年)、添田知道『演歌の明治大正史』(61年)、森秀人『大衆文化史』(64年)、尾崎秀樹『大衆文学』(64年)、高木健夫『新聞小説史稿・1』(64年)、佐藤忠男『少年の理想主義』(64年)、桑原武夫・他『宮本武蔵と日本人』(64年)など。これらの重要な共通点は、「大衆芸術・娯楽」の問題を主に、その歴史的発展過程の追求を通して、日本文化の全体的視野の中に統合的に位置づけ、把握しようとするところにある。

加藤論文は、日本文化についての「徳川四百年」史観の立場から、これまでの民俗学・歴史学の成果を踏まえ、それに新しい意味づけを加えながら、民衆の非言語的コミュニケーションの史的变化の諸相を、主に大衆芸術の先行形態にさかのぼっておさえ、日本における視聴覚文化の生成発展の過程を総合的に考察した労作である。

園部の著作は、現代流行歌曲のみなもとを探求し、さらにその発展過程における音楽的・社会的諸条件の有機的な洞察を通して、流行歌発展の法則性をつきとめたこのジャンル研究の画期的成果といえる。

『日本の大衆芸術』は、佐藤忠男「喜劇」、虫明亜呂無「落語」、森秀人「漫才」、柳田邦夫「浪曲」、邑井操「講談」、鶴見俊輔「流行歌」、加太

こうし「大衆芸術のながれ」、浅井昭治「大衆芸術略年表」を収める。これは、大衆芸術の包括的な史的発展の諸相を明らかにしたばかりでなく、それぞれの芸術種目に定着する大衆の思想や感情をきめこまかにとらえ、それを創造する立場で評価を試み、「民族的な真の大衆芸術を創造するために、これまでの遺産をどう継承するか」を具体的に論じたこの領域研究の現段階における集大成ともいべき好著である。『大衆芸術家の肖像』所収の諸論文によって、作り手ないし送り手分析における伝記的手法の有効性が改めて見事の実証され、また尾崎・高木の両著によって、「大衆文学」研究の体系化がさらに進められたことも特筆に価しよう。

#### IV 研究の課題

戦後日本の「大衆芸術・娯楽」研究は、いっばうでは、日本文化それ自体の内在的理解を深めるためのものとして、庶民思想や文化の基底部の追求として出発し、他方では、日本の独占資本主義体制下におけるその社会機能的な位置づけを主題として進められた。

前者は主に、具体的な大衆芸術種目や作品内容および形式を手がかりに、庶民の日常的な関心構造の二重性を明らかにし、後者は主に、下部構造・上部構造論の構図のもとに、現存の「大衆芸術・娯楽」のもつ階級性ないしイデオロギー性に注意を向けてきた。だが、両者のはらむ問題性は、この領域研究にとって本来たがいにきりはなすことのできない関係にある。とりわけ大衆のより主体的な「大衆芸術・娯楽」創造可能性の追求という実践的課題にたちかえるならば、これまで精力的に集積された実態把握の成果を有効に生かすための諸条件を、再び全体社会的視野での大衆疎外の諸条件と重ねあわせ再検討される必要がある。ただその場合、解き口分析を主軸とする実証的分析の方法を単にアヴェンギャルドの実感論としてのみ評価するとらえ方には、逆に単純な「反映論」的発想に閉じこめられる危険性があることも銘記しておきたい。すくなくとも、文化の相対的自律性を認めるならば、体制の論理と庶民の関

心構造との関係についてのより柔軟な多面的な媒介仮説の設定およびその理論化過程での綿密な検討が今後の最大の課題として要請されるであろう。

さしあたり、より多くのモノグラフの集積が前提となるが、最近、この領域研究の焦点が、次第に社会的関係そのものに向けられ、その史的発展過程についての研究が活潑化しつつあることは、方法論的観点からも注目すべき傾向といえよう。この点、全体社会における個々の文化領域に関する研究を推進してきた文化社会学ないし歴史的な社会を全体として考察する歴史社会学の方法論の導入は、理論化への有効性を高める重要な足がかりとなりうるだろう。研究の課題は数多くかつ困難ではあるが、ここでは以上の課題を念頭において当面問題となるいくつかの側面を指摘しておくことにとどめたい。

(1) 大衆芸術の本質に関する十分な把握のためには、それが興業化し、固定化する以前における成立の根拠を再検討することが重要である。と同時に、それが資本主義的生産様式に組みこまれてゆく社会過程についての考察も必須となる。その点で、民俗学および歴史学の芸能史研究の成果から学ぶべきことは多大であろう。

(2) 大衆芸術・娯楽の諸種目間相互の交流の様相およびその史的発展過程の追求はもちろんだが、それらを取りまく言語の歴史・音楽史・美術史等、他の純粋芸術・文化史との連関性ないし対応関係を明らかにすること。つまり、大衆芸術をおおむねそれぞれの歴史的な社会におけるコミュニケーション構造の分析である。

(3) 庶民思想が創造的な営みとなりうるための諸条件を探るためには、大衆芸術・娯楽の享受以外の他の日常活動との関連を重要視すること。庶民の思想は生活者としての実感に裏づけられているといっても、その多くは単なる生活意識の状態にとどまっており、そのままでは内面から主体性を支える力にはなりにくく、しばしば固定観念に転化しやすい傾向がある。思想の停滞性、固定化を打破する社会関係、とりわけ所属集団や労働過程との力動的な相互規定関係についての論及が望まれる。

(4) 大衆芸術・娯楽の演技者や制作者集団の社会構造および意識構造についてのより精密な研究の蓄積。今日でも様々な形の家元制度や封建的な興業制度が現存しているが、これらに集約的にみられるように、演技者や制作者集団は一種の閉じられた社会である。制作者集団ないし産業構造内部に起因する創造性疎外の諸条件の解剖は、これまで研究の空白部分のひとつだった。

(5) 戦後発展した自発的な大衆文化運動、たとえば各種の文化運動サークル、労音、労演などの運動過程から組織論上の教訓を理論化する作業も残されている。このことは特に、支配体制によるマス・コミュニケーション手段および興業資本の独占強化が進展しつつある現状において、疎外状況を克服する集団思考の組織化という実践的課題とも直結する。

#### 関係主要文献目録 (1945年～1964年7月)

- 1 収録した文献は、戦後に発表されたもののうち、日本の「大衆芸術・娯楽」研究として主要なものと理解される単行本および論文とに限られる。  
従って、研究資料として重要であっても、単なる自伝・随想・解説・時評類に属するもの、および社史・辞典・調査統計類等は、一切省略することにした。  
特に重要とみられる文献については、その主な内容項目を並記した。
- 2 関連分野の文献については、紙面の制約もありこの領域研究に、密接な関連をもち、かつ最低限必要なものだけに限ったが、その点は、選択に不十分な点も多いことと思う。ご教示いただきたい。
- 3 文献の配列は主題による分類法を避け、発行年代順に列挙する方法を採った。単に研究種目別に区分することは、研究相互の関連性を見失うおそれがあると考えたことによる。第2に、年代順の配列は、この領域研究の推移をみる上で、展望がより得易いからである。なお、同年代内の配列は、ほぼ<単行本><特集雑誌><論文>の順に並べてある。単行本に再録された論文に関しては、初期の主要なものを除き、多くは<単行本>のみで扱った。
- 4 この領域研究に関する文献目録には次のものがある。参照されたい。(従ってここでは、「大衆文学」及び「映画」については、特に重要な文献のみにとどめた。)「大衆文学」に関する主要文献目録は、\*尾崎秀樹『大衆文学』(紀伊国屋新書)1962年4月、176頁～193頁。

「映画」については、\*『マス・コミュニケーション講座・第六巻』(河出書房)1956年2月、33頁～40頁。  
小論の性質上、外国語文献及び翻訳についてはふれなかつたが、それらのうち「大衆娯楽・余暇」研究については、\*佐藤毅「最近の大衆娯楽・余暇の研究」『思想』1960年5月、の附録・「主要文献目録」124頁～128頁、に詳しい。

#### 〔1946年＝昭和21年〕

鶴見俊輔「言葉のお守り的使用法」『思想の科学』5月、武田清子「人間観の所在」『思想の科学』

#### 〔1947年＝昭和22年〕

坂口安吾『墮落論』(銀座出版社)

鶴見俊輔「佐々木邦の小説にあらわれた哲学思想」『思想の科学』2月、(鶴見俊輔『哲学論』(創文社)1953年、に再録)

#### 〔1948年＝昭和23年〕

民科芸術部会編『大衆芸術論』(解放社)

特集「大衆の見もの聞きもの」『思想の科学』6月、正岡容「落語に現れたる江戸人の処生観、倫理観及び詩眼」三浦つとむ「浪花節の歴史的な性格」  
特集「映画研究の方法」『思想の科学』7月、山本嘉次郎「日本の映画」／望月衛「映画“酔いどれ天使”の分析」／等。

中谷博「大衆文学の歴史」『思想の科学』1948年8月、1949年5月、

#### 〔1949年＝昭和24年〕

川島武宣他「“望みなきに非ず”を通してたみひとびとの哲学」『思想の科学』3月、

大久保忠利「肉体文学の生理」『思想の科学』4月、

鶴見俊輔「物語漫画の歴史」『世界評論』7月、「大衆小説について」『女性改造』12月(共に鶴見俊輔『大衆芸術』(河出新書)1954年、に再録)

#### 〔1950年＝昭和25年〕

李家正文『らくがき史』(実業之日本社)

今村太平「大衆娯楽とアメリカ思想」都留重人監修『アメリカ思想史』(日本評論社)

思想の科学研究会編『私の哲学・続』（中央公論社）、吉川英治／吉屋信子／三遊亭金馬／徳川夢声／清水崑／竹久千恵子／山本嘉次郎／正力松太郎／藤倉修二／等を収録。

桑原武夫『文学入門』（岩波新書）「なぜ文学は人生に必要か」「大衆文学について」等を含む。

思想の科学研究会編『夢とおもかげ—大衆娯楽の研究—』（中央公論社）、

鶴見俊輔「日本の大衆小説」／武田清子「吉川英治の思想と作品」／大久保忠利「徳川夢声のおかしみ」／川口正秋「久米・菊地の小市民文学」／南博「日本の流行歌」／園部三郎「現代流行歌曲について」／乾孝「流行歌の実態調査」／望月衛「映画の大衆性」／三浦つとむ「浪花節の歴史的な性格」／等

瓜生忠夫「裁かれる隠密」『世界』、1月

高橋碩一「吉川英治の秘密」『日本評論』1月

今村太平「映画にあらわれた日本精神」『思想の科学』4月

鶴見俊輔「ラジオ文化」『日本評論』11月、(鶴見『大衆芸術』(前掲)に再録)

### 〔1951年＝昭和26年〕

中井正一『美学入門』（河出文庫）

藤沢衛彦『流行歌百年史』（第一出版）

特集「大衆娯楽—実態と分析—」『思想』8月、

清水幾太郎「大衆娯楽について」／

松田道雄「娯楽の位置づけ」／中井正一「脱出と回帰」／宮城音弥「大衆娯楽の心理学」／大河内一男「国民生活と大衆娯楽」／瓜生忠夫「娯楽企業としての映画」／南博「アメリカの大衆娯楽」／土方敬太「ソビエトの娯楽と文化」／大衆文化研究グループ「大衆小説研究の一つの試み」／社会調査研究所「戦後日本映画コミュニケーションの実態」／今村太平「日本映画と大衆の思想」／永丘・丸山・他共編「娯楽放送から見た大衆」を収む。

### 〔1952年＝昭和27年〕

鶴見俊輔「大衆芸術の研究」『京都民科年次報告』

10月、「一つの日本映画論」『映画評論』11月、

(共に、鶴見『大衆芸術』(前掲)に再録、

### 〔1953年＝昭和28年〕

福田定良『民衆と演芸』（岩波新書）、「芸術と大衆芸能」「芸について」「悲劇的精神について」「雄弁について」「大衆芸能の将来」等。

特集「笑い」『文学』8月、

柳田国男「日本の笑い」／林屋辰三郎「狂言における笑い」／安藤鶴夫「江戸庶民の笑い」／中村光夫「近代以前の笑い」／福田定良「庶民の笑い」／等。

大衆文化研究グループ「小説“宮本武蔵”における観念構造」『思想』1月

今村太平「アメリカ漫画と日本漫画」『芽』2月

### 〔1954年＝昭和29年〕

鶴見俊輔『大衆芸術』（河出新書）、

「映画と現代思想」「生花の位置」「らくがきと綴方」及び「大衆芸術の研究」「一つの日本映画論」等、前掲論文をも収む。

麻生磯次『滑稽文学論』（東大出版会）

「笑の変遷」「国民性と笑」等を含む。

南博『日本人の娯楽』（河出新書）、

「大衆娯楽—研究の方法を中心に—」「娯楽の心理について」「マス・コミュニケーションとしての大衆娯楽」「日本の流行歌」「演劇の観客層」「チャンバラの流行」、等。

園部三郎『演歌からジャズへの日本史』（和光社）、「絶対主義日本確立過程の民衆歌曲」「大戦成金とオペラ興亡」「レコードと流行歌」「戦争下の民衆音楽」「戦後の民衆音楽」、巻末に年表・参考文献等を収む。

花田清輝『アヴァン・ギャルド芸術』（未来社）

林屋辰三郎『歌舞伎以前』（岩波新書）

日本近代史研究会編『写真・近代芸能史』（創元社）(附・近代芸能史略年表)

竹内好『国民文学論』（東大出版会）

特集「伝統芸術」『文学』5月、

安永寿延「五木の子守唄」／芳沢一郎「伝統芸術の最近の問題」／武智鉄二「狂言の今日的課題点」／等を含む。

特集「新聞小説」『文学』6月、

荒正人「新聞小説の本質」／松島栄一「現代新聞小説論」／平井徳志「新聞小説の社会学的考察」／玉井乾介「新聞小説史」／等。

特集「文学と人生」『思想の科学』10月，  
竹内好「吉川英治論」／梅棹忠夫「宮本武蔵」  
／大野力「君の名は」／今村太平「日本映画史」  
(1955年4月まで連載)／宮内政道「天皇をのろ  
う言葉」／等。

佐藤忠男「仁侠について」『思想の科学』8月，  
(佐藤『日本の映画』(三一新書)1956年に再録)

#### 〔1955年＝昭和30年〕

開国百年記念文化事業会編・香川鉄蔵『明治文化  
史10・趣味娯楽編』(洋々社)，  
(附・明治趣味娯楽史年表)

佐藤智雄『流行—その魅力の分析』(日本教文社)  
池田弥三郎『芸能』(岩崎書店)

『日本文学講座3・日本の民衆文芸』(東大出版  
会)，西郷信綱「民衆文芸の本質」／松島栄一  
「民衆演芸」／等を含む。

近藤春雄『放送文化』(新評論社)

福田定良『面白い人生哲学』(北辰堂)，「大衆参  
加番組」「娯楽映画」等。

特集「日本のうた」『文学』12月，新島繁「日本  
の唱歌」／藤沢衛彦「流行歌と国民感情」／玉  
井乾介「軍歌」／安永寿延「日本民謡」／等。

鶴見俊輔「かるたの話—いろはかるたにみる民衆  
の思想」『思想の科学』1月。

岡田東久・十三「知られていない抵抗(替唄につ  
いて)」『思想の科学』4月

#### 〔1956年＝昭和31年〕

瓜生忠夫『日本の映画』(岩波新書)，「日本映画  
の振幅」「人間の生き方について」等。

加藤周一『雑種文化』(講談社)

須山計一『漫画100年』(鱒書房)

きだ・みのる『日本文化の根底にひそむもの』(講  
談社)

後藤文利『泣きと笑い』(河出新書)

佐藤忠男『日本の映画』(三一新書)，

「日本映画の伝統」「戦後の日本映画」「エノケ  
ンとチャップリン」「呻きと感傷とテンポ」等。

岡本太郎『日本の伝統』(光文社)

森口兼二「娯楽」講座『人間の科学3・人間と社  
会』(中山書店)，「娯楽とはなにか」「娯楽の心  
理」「娯楽の分類」「娯楽の機能」「娯楽発達の  
歴史的條件」「娯楽形式の社会的條件」「戦後日  
本の娯楽」を収む。

特集「日本のうたごえ」『知性・増刊号』4月，  
関鑑子「うたごえ運動の理論」／清水幾太郎  
「平和運動とうたごえ」／村山輝吉「うたごえ  
運動はどう発展してきたか」／羽仁五郎「日本  
の社会と音楽」／等。

荒瀬豊「物語マンガと現代新聞」『新聞学評論』

#### 〔1957年＝昭和32年〕

原田伴彦・藤直幹編『歴史家のみた講談の主人  
公』(三一新書)

花田清輝『大衆のエネルギー』(講談社)

福田定良『日本の大衆芸術』(青木書店)

折口信夫『日本芸能史ノート』(中央公論社)

池田弥三郎『日本人の芸能』(岩崎書店)

田中純一郎『日本映画発達史』(中央公論社)

木村錦花『興行師の世界』(青蛙房)

糸屋寿雄『流行歌』(三一新書)

安藤鶴夫『寄席—落語からサーカスまで』(ダビ  
ッド社)

尾形亀吉『中世芸能文化史論』(三和書房)

講座『現代思想・X・現代芸術の思想』(岩波書  
店) 桑原武夫「芸術の社会的効果」／岩崎昶  
「二十世紀芸術としての映画」／荒正人「芸  
術と大衆」，等を含む。

加藤秀俊『中間文化』(平凡社)，「中間文化論」  
「中間音楽の問題」「見かけと真実」「現代の英  
雄主義」「現代のユートピア」等。

足立卷一『忍術』(平凡社)，「猿飛佐助」「玉田玉  
秀齋と立川文庫」「日本人の空想」等。

稲葉三千男他「大衆文化」，『講座社会学・7・大  
衆社会』(東大出版会)

加藤秀俊「大衆文化」『マス・コミュニケーション』  
(講談社)，「大衆芸術の成立」「大衆芸術の  
役割」を収む。

特集「大衆文学」『文学』12月，

佐々木基一「大衆芸術の新しい形式」／長谷川  
竜生「大衆文学の構造」／浜田泰三「時代小説

試論」／中谷博「大衆文芸の展開とその発展」  
／瀬沼茂樹「家庭小説の展開」／中島河太郎  
「探偵小説の展開」／等。

〔1958年＝昭和33年〕

服部知治『日本の民謡』（三一新書）  
小泉文夫『日本伝統音楽の研究』（音楽之友社）  
旗一兵『喜劇人回り舞台・笑うスター50年史』  
（学風書院）  
佐藤忠男『裸の日本人』（光文社）  
前田勇『上方落語の歴史』（杉本書店）  
週刊誌研究会編『週刊誌』（三一新書）  
加藤秀俊『テレビ時代』（中央公論社）、「テレビ  
文明の展望」「テレビジョンと娯楽」「大衆社会的  
芸術論」等。  
柳宗悦『民芸の四十年』（宝文館）  
尾崎宏次『日本のサーカス』（三芽書房）  
講座『現代芸術・2・芸術家』（勁草書房）、  
本多秋五「芸術家の生誕」／寺田透「芸術家と  
芸人」／南博「芸道意識」／竹内好「芸術家の  
自我と民衆」／清水幾太郎「天才」／等を含む。  
講座『現代芸術・3・芸術を担う人々』（勁草書房）、  
日高六郎「大衆社会における芸術と大衆文化」  
／桑原武夫「小説の読者たち」／野間宏「芸術  
の新しい担い手」／等を含む。  
講座『現代芸術・5・権力と芸術』（勁草書房）、  
竹内好「権力と芸術」／花田清輝「支配階級の  
芸術意識」／佐々木基一「日本的ファシズムと  
芸術至上主義」／鶴見俊輔『「鞍馬天狗」の進  
化』／等を含む。  
加藤周一「日本的なものの概念について」『政治  
と文学』（平凡社）  
特集「今日の笑い」『文学』1月，林達夫「上品  
な笑い・健康な笑い」／岩崎昶「日本の，また  
映画の笑い」／茨木憲「劇場での笑い」／等。  
特集「民俗芸能研究の目的と方法」『芸能復興』  
4月(18号)，池田弥三郎「芸能研究の目的」／  
郡司正勝「演劇史における民俗芸能の役割」／  
後藤淑「民俗芸能と芸能史の問題」／等。  
特集「マス・メディアとしてのテレビジョン」『思  
想』11月，清水幾太郎「テレビジョン時代」／  
日高六郎「テレビジョン研究の一つの前提」／  
吉村融「テレビ・コミュニケーションと人間の

思考」／佐々木基一「テレビ文化とは何か」／  
島田厚「テレビ芸術の基礎」／等。（附・「テレ  
ビジョン関係文献目録」，「テレビジョン発達  
史年表」）

鶴見俊輔「円朝における身ぶりと象徴」『文学』  
7月，

〔1959年＝昭和34年〕

大井広介『ちゃんばら芸術史』（実業之日本社）  
佐々木基一『テレビ芸術』（パトリア書店）  
『大宅壮一選集』のうち『3：世相・風俗』『7  
：マスコミ』（筑摩書房）  
白井吉見編『現代教養全集5・マスコミの世界』  
（筑摩書房）  
宮岡謙二『旅芸人始末書』（修道社）  
世良正利『日本人の笑い』（法政大学出版局）  
鶴見俊輔『誤解する権利』（筑摩書房），  
「一つの日本映画論」「日本映画の思想につい  
て」「鞍馬天狗」の進化」等。  
金沢覚太郎「テレビジョンと文化」『テレビジ  
ョン』（東京堂）  
荒正人・武蔵野次郎編『大衆文学への招待』（南  
北社），（附・「名作解題」「新聞小説年表」）  
特集「大衆の文化を創るもの」『思想の科学』10  
月，掛川とみ子「野間清治と講談社文化(上)」  
／足立巻一「立川文庫の誕生」／神島二郎「庶  
民の中の英雄」／村上信彦「虚像と実像・村上  
浪六」／加太こうじ「大道の芸術・紙芝居」／  
岡本愛彦「テレビドラマの方法」／等。  
加藤秀俊「佐藤忠男の方法」『思想の科学』4月。  
秋田実・福田定良「放送演芸30年」『CBCレポ  
ート』1959年12月～1961年5月。  
〔1960年＝昭和35年〕  
塚崎進『笑いの誕生』（現代教養文庫）  
羽仁進『カメラとマイクー現代芸術の方法』（中  
央公論社）  
講座『現代芸術・1・芸術とは何か』（勁草書房）、  
佐々木基一「芸術の発生」／鶴見俊輔「芸術の  
発展」／を含む。  
林屋辰三郎『申世芸能史の研究』（岩波書店）  
『近代日本思想史講座・5・指導者と大衆』（筑  
摩書房），桑原武夫・加藤秀俊・山田稔「ジャー  
ナリズムの思想的役割」／多田道太郎「大衆文



化運動」／を含む。

乾孝『マス・コミ時代と芸術』（理論社）

川添登『芸術の変貌』『建築の滅亡』（現代思潮社）

菅忠道『戦後のマス・コミと児童マンガ』『文学』

1月, 2月

特集「テレビ芸術」『文学』2月,

佐々木基一「テレビ芸術の今日の問題」／岸田功「大衆性・真実性・芸術性」／岡田晋「現代芸術における映像の役割」／等。

特集「われわれの感情」『思想の科学』3月,

花田清輝「日本人の感情表現」／梅原猛「笑いの哲学」戸井田道三・藤田省三「不覚の涙と自覚の涙」／等。

特集「大衆娯楽」『思想』5月,

南博「娯楽の肯定と娯楽の否定」／松下圭一「大衆娯楽と今日思想状況」／岡部慶三「娯楽志向と生活様式の変化」／田中清助「労働観・余暇観の変化と社会体制」／野口雄一郎・稲葉三千男「大衆娯楽と娯楽産業」／佐藤毅「最近の大衆娯楽・余暇の研究」／佐藤忠男「戦後日本映画のヒーローたち」／横手真夫「スポーツの大衆化」／等。

特集「大衆文学」『文学』7月,

小松伸六「大仏次郎論」／杉浦明平「吉川英治, その文学的でないもの」／尾崎秀樹「底辺の文学史ノート」／座談会「明治の大衆文学」等。

特集「笑いの創造」『思想の科学』9月, 太田浜路「漫画の精神」／秋山清「ある川柳作家の生涯」／本間長世「大衆社会における文化」等。

特集「大衆芸能」『文学』12月,

西山松之助「大衆芸能における近世から近代への推転」／長谷川竜生「泣きと笑いを支えるもの」／木島始「前時代の大衆的なもの」／尾崎秀樹「戦後における浪曲論争」／比留間尚「成立期における落語の社会的基盤」／足立巻一「大阪道化の笑い」／加藤秀俊「漫才と日本人」／岩田宏「歌謡曲について」等。

特集「忠臣蔵」『思想の科学』12月,

久野収「文化の共有財産に光を」／広末保「忠臣蔵の意図するもの」／樋口謹一「組織論四十七士」／鶴見俊輔「切腹の哲学」／加藤秀俊

「沈黙の言語・死の言語」／佐藤忠男「歌舞伎と講談」／加太こうじ「鶴屋南北の世界」／梅原猛「敵役の笑い」／荒瀬豊「“死出の旅”ノート」／山田稔「現代の復讐者・松本清張」等  
佐藤毅「娯楽メディアとしてのテレビジョン」  
『新聞学評論』10』

安達生恒「“家の光”の歴史」『思想の科学』6月, 9月。

#### 〔1961年＝昭和36年〕

瀬木慎一「視覚芸術論」(内田老鶴圃)

尾崎秀樹『殺しの美学』(三一新書), 「庶民のなかの英雄」「底辺の文学史」等。

榊山潤他編『歴史文学への招待』(南北社),

高橋碩一「大衆小説の歴史性」／田野辺薫「“新平家物語”と歴史文学」／足立巻一「立川文庫と猿飛佐助」等。

講座『現代芸術・4・マスコミのなかの芸術』(勁草書房), 南博「パーソナル芸術・マス化芸術・マス芸術」「大衆芸能のマス化」／深山敏「電波の芸術」／早川和延「菊池寛論」／波木井皓三「小林一三論」／西田勝「企業企識と芸術意識」／等。

久野収他「子どもの英雄像・理想像」講座『現代教育学』15』(岩波書店)

特集「日本の推理・探偵小説」『文学』4月,

瀬沼茂樹「黒岩涙香」／村松剛「松本清張と探偵小説」等。

特集「大衆芸術」『思想の科学』12月,

高倉テル・手塚治虫他「大衆芸術とは何か」／鶴見俊輔「漫才について」／小川春香「八方破れの叙事詩・浪曲」／邑井操「自伝的講談論」／加太こうじ「九千万人の絵画」／森秀人「梶間の意地と精神」藤川治水「光と影の狩人」等  
加藤秀俊「にっぽん視覚文化史」『CBCレポート』1961年7月～1962年11月。

安永寿延「民謡の成立」『文学』7月

#### 〔1962年＝昭和37年〕

加太こうじ『落語』(現代教養文庫)

池田弥三郎『日本芸能伝承論』(中央公論社)

多田道太郎『複製芸術論』(勁草書房), 「複製芸

術について」「小市民の文学意識」「娯楽の周辺」「芸術家の待遇の歴史」「金銭観の問題」等  
園部三郎『日本民衆歌謡史考』（朝日新聞社）、  
「現代流行歌謡曲のみなもと」「維新変革の前後」「唱歌教育の普及と俗謡」「東京と地方を結ぶ流行歌」等歴史的推移を追って記述。

佐藤忠男『斬られ方の美学』（筑摩書房）

林屋辰三郎・梅棹忠夫他『日本人の知恵』（中央公論社）

向井爽也『日本の大衆演劇』（東峰出版）

加藤秀俊『目と耳の世界』（朝日新聞社）

鶴見俊輔加太こうじ他『日本の大衆芸術』（現代教養文庫）、佐藤忠男「喜劇」／虫明亜呂無「落語」／森秀人「漫才」／柳用邦夫「浪曲」／邑井操「講談」／鶴見俊輔「流行歌」／加太こうじ「大衆芸術のながれ」その他「大衆芸術名作百選・解説」「大衆芸術略表」を収む。

特集「日本の推理小説」『思想の科学』7月、  
鶴見俊輔「ドグラ・マグラの世界」／沢田允茂「推理小説と論理的思考」／等。

特集「日本の美学」『思想の科学』11月、  
梅原猛「日本の美意識の感情的構造」／西川長夫「深沢文学批判の批判」／橋本峰雄「深沢七郎の“庶民”の世界」／虫明亜呂無「エログロ文化の創始者・梅原北明」／等。

中川明德「太平洋戦争と浪曲界」『文学』4月

佐藤忠男「戦争と映画」『文学』4月

#### 〔1963年＝昭和38年〕

講座『20世紀を動かした人々・8・大衆芸術家の肖像』（講談社）、山田稔「チャプリン」／加藤秀俊「ドイルとフォーディニ」／大宅壮一「カール・ハーゲンベック」／鶴見俊輔「黒岩涙香」／富士正晴「桂春園治」／花田清輝「桃中軒雲

右衛門」／を収む。

武者小路穂『絵巻』（美術出版社）

全国放送労働組合協議会編『燃えろ、アンテナ』（七曜社）

『今日の社会心理学・5・文化と行動』（培風館）

品川清治「芸術行動」／藤竹暁「大衆文化」／を含む。

添田知道『演歌の明治大正史』（岩波新書）

桑原武夫『日本文化の考え方』（白水社）

名取洋之助『写真の読み方』（岩波新書）

講座『現代社会学講座・4・コミュニケーションの社会学』（有斐閣）、江藤丈夫「文化創造」／山田宗睦「コミュニケーションの社会的機能」／等を収む。

清水幾太郎「大衆文化について」『凶書』2月

藤川治水「忍者武芸帖論」『思想の科学』7月

#### 〔1964年＝昭和39年〕

森秀人『大衆文化史—日本人の性と生活』（産報）

尾崎秀樹『大衆文学』（紀伊国屋新書）、「大衆文学の成立」「時代小説の効用」「虚構のなかの英雄たち」「国民文学の周辺」等。

関山和夫『説教と話芸』（青蛙房）

加太こうじ『国定忠治・猿飛佐助・鞍馬天狗』（三一新書）

高木健夫『新聞小説史稿・1』（三友社）

佐藤忠男『少年の理想主義』（明治図書出版）

「理想像の原型立身・英雄主義」「現代児童漫画の思想」等。

桑原武夫他『宮本武蔵と日本人』（講談社）

山本明「マスコミにおける笑いの構造と機能—マジメ否定論」『放送朝日』4月

羽仁進「映像とは何か—その序説」『文学』7月